自己の行為のすべてを皇室の「尊栄」と日本民族の繁栄に仮託し得た幸福な組織人ということになろう。裁判の席で橘宗一少年殺しを詰問され、自分も子供は好きだと釈明したとしても、ぼくを納得させることは出来ない。「ファシストだって子供は好きで無口で目的達成のためには禁欲的であるだろう。そして掌も柔かいだろう。しかし彼がファシストであることに変りはない」のだ。また次のようにも言えよう。「右も左もみな同胞」。そうだ。しかしこの場合、右に立った男が左にいた同胞を殺した。それが裏街道とはいえ、彼の栄達につながり、更に多くの同胞を苦しめさいなんだという事実は、例え満映三千人の社員から彼甘粕が愛慕されたとしても、それから北京の並木の伐採を取止めさせたとしても、いづれ権力の中枢に参加し得た者の思いつきであって、ヒューマニズムとはそれ程甘いものではないことを知るべきであろう。

特別資料

七〇才のサルトル

M・コンタ　貴方の健康について色々噂がありますが今月で70才すね。サルトルさん、如何ですか？

S　良いとは言えないが、悪いとも言えません。この2年間色々悪いところがありました。1キロも歩くとすぐ足が痛むのです。それに血圧が問題で、ところが急にそれは問題にならなくなってしまいました。一番悪いのは左眼の眼底出血で、それが僕のものを視る只一つの眼だからーそうです、3才の時左眼はみえなくなったのですーだから今ではものの形がぼんやりみえるだけになってしまってー光や色は見えますが、事物や顔が明瞭に見えないので、読み書きできないのです。もっと厳密に言えば、書くことはできる、つまり自分の手で言葉は形づくれるけど、それはなんとか出来るが、自分の書いたものが見分けられないのです。読む方は全く駄目になった。行や文字と文字の開きは判るけど言葉自体の識別ができない。読み書きの能力がないのだから、僕はもう作家としての活動の可能性がなくなった。作家としての僕の職

業は完全に破壊されたのです。

だけど未だ話せます。だからテレビ製作費ができれば僕の次の仕事はシリーズ番組を作って、今世紀の75年間の出来事を語るつもりでいます。シモーヌ・ド・ボーヴァル、ピエール・ヴィクター、フィリップ・カビーと共働しますが、彼等が自分達の考えで編集するもので、それは僕には出来ない。これが現在の僕の状況です。その他は健在です。よく眠れるし、心も10年前と同じく鋭敏です。いやそれ以上の鋭敏さとはいえないがそれ以下でもないという事ですねー兎角、僕の感受性は変っていません。いつだって記憶は確かだし、氏名は別です。氏名を想い出すのには努力がいるが時には全く失念します。だから想い出すのに前もって事物を宛ててやっています。街路に出ると別に困難はありません。

M　書けないのは痛打だと思うのに、貴方は落着いて語りますね。

S　ある意味では、それが僕の生存の理由を奪ったと言えます。以前は貴方のご希望に副えたのがこれからはそうは行かなくなるのですから、敗北感を覚えます。だけど理由は判らないが、いい気持です。決して悲しくなんかないし、僕の失ったものを考えて憂うつになることもない。

M　抵抗を覚えませんか？

S　誰にまた何に僕が抵抗するのですか？　ストイックにとらないで下さい。僕がいつでもストア派に共感していたのはご存知ですね。そうです。物事はなるようにしかならないのであって、それについて僕のできる事柄は何もない。だから動てんする理由もない訳です。2年前は事情がもっと悪くて、苦しかった。軽い錯乱に襲われました。アヴィニョンあたりを歩いていた時です。シモーヌ・ド・ボーヴァルと一緒で約束した少女に逢うつもりでした。本当はそんな約束はなかったのです。

今僕のできる事は自分を最善に活用することで、それに慣れ、可能性を評価して、活用するのです。勿論、視覚の喪失は働いけど、医師に相談したところでは治癒しないそうです。これは酷い、というのは何時でもではないが時に書きたいと思う事柄に動かされるからです。

M　途方に暮れた感じですか？

S　ええ、少しは散歩し、新聞を読んで貰い、ラジオを聞き、時にはテレビの映像を垣間見ますが、これこそ貴方の言われる途方に暮れたということでしょうね。僕は前もって考えた事を書くのが慣わしだったけど、それでも重要なのは書くこと自体でした。今でも考えはします。だけど書くことができなくなると思索の実際活動のある

部分が抑圧されるのです。

僕にとって受入れ難いのは、今日の多くの若い人達が軽視している「文体」についての考えです。言わばある観念なり一つのリアリティを提示する文学的仕方ですね。これは当然、改訂を必要とする「それも時によれば5～6回の改訂をすべきでしょう。だけど僕は作品を一度もいじったことがないのです。書いたものは読まない。だから僕が書いたり話したことは初出が残るのだと言えます。それで誰かが僕の書いたり話したことを読みかえして呉れたら、悪い箇所を少し修正するけどそれだって自分でやる改訂という程のものではありません。

（インターヴュアが改訂にテープレコーダを使ってはどうかとの問いに、サルトルは話すことと書くことの差異を揚げ、再読において文章の誤りをみつけるのであって、テープの回転速度は人間の読みとる速度と異り、より速いかより遅いかのいづれかで満足できないと答えている。また自分の知的活動は自己の内部にあって、熟考を導くものだから、その熟考の分野で自分の考えを改訂するもので全く主体的なものに留ると言い、そこで文体を要する作品こそ、書く行為に価するとしている。そしてつづける「）

S 今日多くの若い人達は文体にわずらはされず、言いたいことを単純に言えばそれがすべてだとしていますね。僕にとって、文体は単純性を排除しないが、それとは全く背反するものです。まず3つ～4つのものごとを1つに言う方法なのです。一箇の単純な文章があるとする、その直接の意味も判るとして、同時にその直接性の意味の下に、他の意味が形づくられているのです。だから意味の二義性を言葉に付与できなければ、書くわずらわしさはいらないのです。例えば文学と科学的伝達を区別するものは曖昧さということでしょう。言葉の芸術家は言葉を自分が強調したく、重要性をかける仕方に従って、言葉を配列するから、それが時と場所によって、一つの意味でなく、色々な意味を持つようになる。

M 貴方の哲学的草稿ではほとんど修正や消した跡もなく、普通の筆記法で書かれている。ところが文芸作品だと非常に努力して完成されていますが、この差異はどうしたのですか？

S 対象が違うのです。哲学作品では、各センテンスは一つの意味しかない。例えば僕が「言葉」（Les Mots）を書いた際には、各センテンスに多義で加上的意味を付しました。だがそれを哲学作品にやると駄作になるのです。例えば、「対自」と「即自」の概念を説明するのは

難しい。そこで色々と比較や証明を与えて明瞭になるようにします。しかし。その観念がそれ自体に含んでいるものにとゞめるべきです。だからと言って、その範囲で完全な意味が判るとは言えない。その概念は、その哲学作品を完成するにつれて、増えて行かねばならない。

僕の言いたいのは、哲学は科学的コミュニケーションと同じく曖昧であってはいけないということです。

文学では、ある程度、いつでも生きられたものを取扱う、僕の言う事は僕の言うことによって全部が表現されるのではない。同じリアリティが色々な仕方で、実際には無限な方法で表現され得るのです。そこでその本全体が読み方を指示し、次ぎに各センテンスはその読み方の声の調子まで、声を出して読むか読まないかまで要求するのです。純粋に客観的なセンテンス、よくスタンダールに認められるものでも、多くの事柄を言い残しています。けどこのセンテンスはそれ自体の中にすべてを含んで居り、さようにして、作者が心の中に絶えずもっていて、奔出させようとしていた意味の総体を確保しているのです。その結果、文体のある作品は、一センテンスを彫り込むということではなく、場景や章やその本全体を越えた総体を心の中に絶えず確保したものから成立するのです。もしこの総体が現われるなら、貴方はいい文章（センテンス）が書けます。それが現われならなら、文章は不快な音でガタビシしたものになります。ある作家達にとって、この作業は他の人達より長い苦しいものになります。だが一般的に言えば、例えば哲学においてのように、一つの文章を一つの文章で表現するより、一つの文章に四つの文章を書きこむ方がはるかにむづかしいのです。「私は考える　故に　私は存在する」のような一つの文章はあらゆる方向に無限の反響をもっているが、一文章としてはデカルトがそれに与えた意味しかもっていない。ところがスタンダールが書いたように、「ヴェリエールの時計台が見える間、ジュリアンは振り返った」では主人公の行為を言うだけの中に、スタンダールはジュリアンが何を感じ、ルナール夫人が何を感じているかを同時に僕達に示しているのです。だから明白なのは「私は考える　故に　私は存在する」のような一文章をみつけるよりも幾つかの文章に代る一文章をみつける方がはるかに難しいのです。僕の考えでは、デカルトはそれを考え出した時にあの文章がすべてだと認めたことでしょう。

（読書について、サルトルはシモーヌ・ド・ボーヴァールに読んで貰っていると言う、自分で読むのと違い、ボーヴァルの読むスピードについて行くのは慣れる迄が大変だが読後に合評するし、声を出して読むのは眼で読む

のと違って明瞭になるものがある。合評の後から自分の心の中のものを引き出すと言う。さような人頼みは確かに苦しいことだったが、現在では苦痛ではなくなった。しかし不快なのは事実だ。自分は〈独りで読み独りで書き、今でも知的仕事は孤独を要すると思う〉と答えている。サルトルの思想の中には〈見る、見られる〉の関係において透明性が主題の一つになっているが、それに関連して…）

S　…僕は考えるが、人間関係を損っているのは各自が重要な事柄を他に対し隠すことです。すべての人に開示する必要はないが少くとも当事者から隠すことです。透明性が秘密に代るべきです。何時の日か、二人の人間がもはやお互いに秘密をもたなくなるようになるでしょう。何故なら誰も秘密を要さなくなるのです。主体的生活と客体的生活が完全に提供され受入れられる。僕達が現にやっているように身体を与えはするが思想は隠すということが不可能になる。そこでは身体と意識の基本的差別がないのです。

S　僕達は性的関係の分野以上に自分の身体を他人に与えている。例えば、視る、触れるという仕方でね。君は君の身体を僕に与え、僕は僕の身体を君に与えている。僕達は身体として、他に対して存在しているのです。だが意識としては、また観念としてはこの同じ仕方では存在していない、観念は身体の修飾でしかないのですがね。もし僕達が身体として、絶えずあからさまになる身体として、他者に対し実存するのを本当に望むなら、例えそれが起り得ないとしても、観念は身体から出るものとして、他者に現われるのです。語は口の中の舌によって形づくられる。すべての観念はこの仕方で現われるのですから、それがどんなに不明瞭で、移ろいやすく、そして触知しがたいものであるか…しかしこの隠されたものが在り得なくなる。この秘密はある世紀にはある人びとの名誉と同一視されたいたが、僕には馬鹿げてみえるんです。

M　この透明性の最大の障害は何ですか？

S　先ず悪ですね。その意味（悪とは）は異る原理によって示唆された行為であり、僕の認め難い結果を持つものです。この悪がすべての思想のコミュニケートをむづかしくしている。というのは他者が彼の思想を形づくるのに用いる原理は僕のと同じだとして、その範囲が何処まで及んでいるか僕は知らないということです。勿論、ある程度、それらの原理は明瞭になるし、討議できるし確定され得るでしょうが、僕が誰にでも何かを語り得るというのは真実じゃない。僕は貴方とならできるとして

も隣人とか街を歩いている通行人とはできない。極端な場合では、僕と卒直な討議をするよりその人は闘うことさえするでしょう。そこであたりまえのように（Quant-à-soi）不信、無知、恐れが生まれてお互いに信頼しあえないとか、十分信頼できなくなるのです。更に個人的には、僕は出逢う人の誰にでもすべてを表現しないにしても、出来るだけ透明であるよう試みます。というのは僕達が内臓しているその暗い部分は僕達にとって暗いと同時に他者に対しても暗いのであって、それは他者に対し明白にしようとする限りで自分にとっても明白になるのだと思います。

（その透明性を書くことに求めたのではないかとの問に答えて、初めからその積りはなかったが、書くことで遠くまで行けた、別言すれば相当に透明になった、だが十分ではなく、今は書けないから話し合いにそれを実現しようとしているが十全にできるとは思えない。何かが残るし、それは自分に対しても残るものであって、暗い深みは語りつくせないと言う。因みにキエルケゴールは秘密は墓場へもって行くと言ったがサルトルもその心境らしく思われる）

S　…人はすべてを語れないのはご存知でしょう。しかし思うに後になって、つまり僕の死後、多分貴方の死後になって、人は自分についてもっとよく語るようになり、それが多くの変化をもたらすでしょう。更に僕の考えではこの変化が本当の革命を連結させると思います。（現在中国の民衆が自己を語るのは、例えば苦しさを思いだす為に苦しさを語るのはこの文脈で革命と思われる－訳者註）人間の実存は彼の隣人に対して全く可視されるものでなくてはならない。そしてその人（隣人）の実存もひるがえって彼に可視されるのでなければならない。それが真の社会的調和を成立させるのです。（訳註、フーリエの調和説を想い出させる）これは今日実現されていないが、経済・文化・人間関係に変化が起きたら、物質的欠乏が除去されたら初めて実現するだろうし、僕が「弁証理性批判」で示した通り、それが人びとの間での過去現在を通じての敵意の根源だと思います。勿論他にも敵意はあるだろうし、僕の考え及ばないもので、誰も考えられないものがあるかも知れない。けれどそれらは各自が完全に他者に自己を与えるところでの社会性を形成する障害にはならない。むろんさような社会は世界的規模での社会でなければならないでしょう。世界のどこかに不平等や特権が残っているなら、その不平等によって起きる闘争は少しづつ全社会を浸しよくするでしょう。

M　書くということは、秘密や敵意から生まれるのでは

ないでしょうか？　調和のある世界では最早書くことの存在理由はなくなるのではないですか？

S　書くことは確かに秘密から生まれるが忘れてならないのは、書くことでこの秘密を隠すとか嘔をつくことではないということです。その場合、利害なしであることこの秘密の一べつをあたえるとか、人が他人との関係にあることを示すことによって明らかにするのは、その限りにおいて、僕の望む透明性に近接する訳です。

（サルトルはフィクションの形で真理が語れると考えていたが、そうした間接的仕方では無限に自叙伝を語るしかなく、それはやりたくない。むしろ「ここに提示された人間はサルトルだ」と読者が言わざるを得ないような人物を創出すべきだったと思うと言う。しかしそれは人物と作者を重ね合わせることではなく、その人物についての最良の理解方法として、作者からその人物へ至ったものを求めることであろうと言う。そうすれば〈それはフィクションではなくなる。それが今日の書くことの意味である〉。書くことの意味は〈僕がペンを執る。僕の名前はサルトルで、これが僕の考えていることだ〉とする）

M　一つの真理はそれを表現する個人から独立しては述べられないのではないでしょうか？

S　やがてそれは興味をひかなくなるでしょう。世界から個人や個性をひき離し、客体的真理（複数）しかなくなるからです。人は自己の真理だと考えることなく、客体的真理を獲得するのです。しかしこの客体の背後にある個人の客体と主体の両方に言及するのが問題になるなら、それは客体としてのその人の一部であるからして、そこでは「僕はサルトル」と書く必要があるでしょう。だがこれこそ現状では不可能です。何故なら僕達はお互いに知らな過ぎるし、フィクションの廻り道がこの客体－主体の全体性により効果的に迫れるのです。

M　と言われると貴方自身の真理には「言葉（ルモ）」に書いたよりもロカタンやマーシュを通しての方が近づけるということですか？

S　多分ね。だけどむしろ「言葉」は「嘔吐」や「自由への道」と同じだけ真実なのです。僕がレポートした事実が真実でないと言うのではなく、「言葉」だって一種の小説形式であるが、それでも小説に変りないということです。

（サルトルは哲学作品と文学作品を通じて真理を述べつづけた積りだが、いつも何かが残り、時間に追われつ

づけたと答えている。また何故書き言葉を選んだかとの質問に対し、話し言葉は不十分で、意味深い会話は知識人の間でしか不可能である。対話でさえ、お互いがすべてを語り尽したようにみえても問題は話し終った所から始まる。そこでフィクションが必要だったとしている。ボーヴァルの回想では一九五七年以来〈時間や死に対し息もつかぬ競争を挑んでいた〉とあるが、何かどうしても言って置きたかったのかどの問に答え…）

S　ある意味ではそうでした。丁度「弁証理性批判」を書いていた時で、そんな感じに苦しみ、また全部の時間をとられていました。一日一〇時間働き、コリドランを遂に一日20錠飲んだ。どうしてもこの本は書きあげなければならないと思ったのです。アンフェタミンで思索の速度が速まり、書く方も僕の普通速度の少くとも3倍になりました。それ程速くやりたかったのです。

それにブタペスト以来、僕がコミンニストと袂を分った時期でした。この決裂は決定的ではなかったけど紐は切れたのです。一九六八年以前だとコミンニスト運動が全左翼を代表していました。だから党と手を切るのは自分を流謫するのと同じでした。左翼を離れたら、多くの人がやったようにソシアリストの側、つまり右翼に移動するか、一種の置き捨て場に留るか、残された事といえばコミンニストが貴方に考えて欲しくないものの限界を思索するしかなかったのです。

「弁証理性批判」を書くことは共産党が思想に影響を及ぼす範囲の外側で僕自身の思想を説明する一つの道であったのです。あの「批判」はコミンニストに対して書かれた一マルキストのものでした。僕は本当のマルクシズムがコミンニスト達によって、完全に歪められ嘘になっていると思った。しかし今はそうとは考えません。

（さような切迫さは老いから来るのではないかとの質問に対し、彼は「アルトナの幽囚」を書いていた時の状況－不意にウィスキーのグラスを取り落して壊したこと。医師の診察を受けるようすすめられたこと、以来執筆を中止し、「アルトナ」に一年かかったのを述べ、「フロー－ベル」についても現在第3巻で終っているが第4巻を書く積りはないこと、言うべき事は言ったとしている）

S　…僕は自分の半盲を通じて－これは偶発事だけど－だから他の人にも起り得ると思うが、死の近づきを通して、老いを感じています。しかしこれは否定できない事柄でしょう。僕がそれを考えたことがなかったとか、そんなことはないが、来るのは判っていたのです。

M　すると以前に知っていたのですか？

S　ええ。知っていたけど考えなかったのです。本当にそうしなかったのです。ご存知のように僕は自分が不死身だと信じていた時期があった。三〇才頃です。だけど今は自分が死ぬんだと、死を考えないで死ぬんだと知っています。端的に言って、僕は人生の終期にいて、それ故、ある種の仕事は不可能になった。知性では一〇年前と変らないけど仕事の規模や困難さが僕にできないのを知らせているのです。だが重要なのはやるべき事をやったかどうか、良い悪いは問題じゃない。兎角試みたんだし、それにあと一〇年残っている訳です。

（彼は個人的心境としてはジードの晩年と同じ平静さを得たが、社会についての考えはジードと異ると答えている。また健康について…）

M　貴方は健康に留意すべきではなかったでしょうか。結局「弁証理性批判」を書いた結果、健康を害したのですからね。

S　何の為の健康ですか？「弁証理性批判」を書く方がよりよいのです。これは誇りなくして言えるんだけど、すばらしい健康より、長くて厳密でそれ自体が重要なものを書く方がより良いのです。

（現在若い知識人達がサルトルの思想や作品を誤謬として読まないのに触れ、インタビュアはローランバルトを引用して近く再び読み始められるだろうとの慰めをかけたのに対し、彼はそうあって欲しいと答え、読んで貰いたいのは「シュチエーション」「聖ジュネ」「弁証理性批判」「悪魔と善神」それに「嘔吐」をあげている。「存在と無」が欠落しているのは不思議の一つか?!）

M　一九六八年貴方は言った。＜もし僕の作品を全部読んだら、僕が深刻に変化していないことが判るだろう。そして僕はいつだってアナーキストだった…＞

S　それは本当です。僕が準備しているテレビで明らかになるでしょう。僕が「嘔吐」を書いていた時、自分がアナーキストであるのを知らなかったという意味では、僕は変った。当時あれを書いていて、アナーキストの解釈をしているとは認めなかったのです。只、「嘔吐」のメタフジックな観念と存在のメタフジックな観念の関係だけ見ていました。それから哲学することで、僕の中にアナーキストが存在するのを発見した。僕はそれを見つけてもそう呼ばなかったし、今日のアナーキーは一八九〇年代のアナーキーとは何の関係もないのです。（訳註一八九〇年代のアナーキーは個人的テロの時代、但しベルーチエ、フォール、ジャングラーブ等のサンジカ運動が対置されなければ公平とはいえない。参照・フランス

に於けるアナキズム運動）

M　事実貴方は所謂アナーキスト運動には同調していませんね！

S　していません。それどころか遠ざかっていました。けれど僕の上にどんな権力も受付けず、いつもアナーキーを考え、その意味は権力のない社会を実現しなければならないと考えていたのです。

M　貴方がすべての権力を拒否するのも含め、にもかかわらず、自分が権力を振っていた事実は認めるでしょうね。

S　僕は間違った権力を持っていた。それは教授の権力です。しかし教授の実権は、例えば教室で喫煙を禁止するとか、生徒を落第させることでしょう。僕はそれはやらなかったし、いつも及第させていました。知識を伝達していただけです。それは権力じゃなく、どう教えるかの問題です。僕が生徒に権力を振っていたかどうか旧友のポストに聞いて下さい。

M　有名もまた一種の権力を貴方に与えなかったでしょうか。

S　そうは思えない。警官が僕に身分証明書の提示を丁寧に頼むぐらいですよ。そうしたことを別にすれば、どんな権力があるのか判りませんね。僕は自分の話す真理の力以外に何もないのです。

M　貴方について驚くべきことの一つは、決して相手に対しイニシャチブを取らないことですね。

S　とりませんね。人に好奇心をもたないからでしょう。

M　けど書いていますね。＜僕は人間を理解するのに情熱を持っている＞とね。

S　ええ、人と面接したら、その人を理解したい気持はあるけど、だからと言って、自分の仕方から外れてまでその人の所へ行きはしません。

M　隠遁者の態度ですね。

S　隠遁者か、そうですね、指摘しておきたいのは、僕の廻りにいるのが女達だということです。僕の生活には何人かの女達がいる。ある意味ではシモーヌ・ド・ボーヴァル一人だともいえるけど兎角、何人かいるんです。

M　貴方は言ってますね、＜僕が本当にやりたいのは机に向って書くこと、好ましいのは哲学することだ＞と…

S　そう、本当に好きなのはそれです。だがいつだって机までは距離があった。そこえたどりつくには俗事を打ち切らねばならなかった。

M　仕事以外での孤独は嫌いですか。

S　多くは独りでいるのが好きです。戦前、シモーヌ・ド・ボーヴァルが自由でなかった頃「バルザル」（料理

店名）でひとり食事するのが好きでした。僕の孤独を感じましたね。

M 最近はどうお過しですか？

S 僕の生活は単純です。あまり動き廻れないのでね。朝は八時半に起きる。寝るのはシモーヌ・ド・ボーヴァルの家ですが、朝食は途中のキャフェ、そう僕が一番好きなのは〈ラ・リベルテ〉（自由の意）ですがこれは僕にぴったりの名前です。ゲイテ通りとエドガキネット街のはづれにあって、僕の住居から二〇〇ヤードです。モンパルナスではくつろいだ感じになる。あの附近には何人かの知り合いがあって、みなキャフェの給仕だとか新聞売りの女だとか商店主達です。

僕はいつも仕事の時間にそって生活を組んでいます。九時半から大体一時半まで、それから午後五時または六時から九時までが仕事。この時間帯に空白ができることもあるが、大体守っています。それからビヤホールでランチをとって家へ帰るのが四時半頃ですか。

シモーヌ・ド・ボーヴァルがいつも待っていて呉れてお喋べりをするとか何かの本や新聞、ル・モンドとかリベラーシオン、その他を読んで呉れます。それが八時半か九時までかかって、終ると一緒に彼女の部屋へ行き、大体音楽を聞くとか、また読書をつづけ、寝るのですがそれは十二時半ぐらいですね。

（このあとサルトルは音楽について語るが、幼児の頃からピアノを習いまた家族みなが音楽好きで、従兄のアルバート・シュバイツアの思い出を語っている。彼はバロック音楽も好きだが著書でコメントした事はない。ドビッシュ風な作曲をした事もあると言う。現在は養女のアルレテのフルーツに合せピアノの伴奏をしたり、歌うこともあると言う。話題は個人崇拝についてへと進む）

M 崇拝という感情には親しみがありますか？

S いいえ、僕は崇拝しない。また崇拝して貰いたいとも思わない。人間は崇拝される理由がない。人はみな同じで平等なんだ。重要なのは彼が何をしているかということです。・・・（ユーゴについて述べた後）崇拝は人が崇拝の対象より劣るのを認めることです。けどすべて人が同じだとすれば崇拝はあり得ない。他者に対して示す人間の本当の感情では、評価があります。……（中略）愛と評価は一つのものの両面で相互に関係がある。むろん評価に愛することは絶対必要ではないとしてもその逆でもないのです。しかし両方が備わると人はお互いに正しい態度がもてるのです。未だ僕達はそこまで至っていませんね。でもそうなれば主体性は完全に明白になる。

（カミュとの友情が壊われた原因を述べ、カミュは最初自分が偉大な作家であるとは気づかず、また最後までアルジェの頑健な男で、一種風変りな無頼派だったが、最後の友人だったと述べている。彼は友情よりも女との関係の方が、手の言葉、顔の言葉、つまり言葉自体の深みは性の方からのものがよく表現されると答えている。なお金銭について、サルトルは幼児期から金に苦労するとの意味が判らず、教えることや著作で金が入って来る意味が理解できなかったとしている。金銭は偶然の指標だそうだ。とすれば出来るだけ金銭を身につけないよう他に与えるのが得策である？）

M 貴方だってものを買ったり所有したいとは思うでしょう？

S ええそういう事もあります。受取ったもののすべてを与える訳じゃなく、自分のためにものを買いますよ。けれど自分の家やアパートを買いたいとは思わないんです。僕は自分の金の与え方に罪悪はないと思う。僕が与えるのはそれが出来るからだし、また僕の興味を引く人がそれを必要としているからです。僕はあやまちを拭うためとか、金銭が重荷だからあげるんじゃんないんだ。

M 私が貴方と知合って驚いたのは、何時だって貴方が札束を身につけて居られたことです。

S それは本当です。ポケットによく百万フラン（約二五〇〇ドル）ぐらいもっています。金を持ち歩くのでよく人から叱られました。シモーヌ・ド・ボーヴァルにからかわれたもので、全く馬鹿げていますね。本当を言えば、今はやっていません。落したり盗まれるからではなく、僕の視覚のせいなんだ。僕は札を間違えるんで酷い目にあいます。それに金を身につけるのは好きだし、ないとなると不快なんだ。その理由を訊ねられたのは全く今度が初めてですね……札束を取出す図なんて大物ぶってみえるでしょうね。シモーヌ・ド・ボーヴァルと僕がよく行くコテ・ダ・ジュールのホテルで女性の臨時支配人がシモーヌに苦情を言ったものでした。僕が金を多過ぎて支払うとね……。でも僕はそんな大物じゃないんだ。僕が大金を身に付けているとしても、それは僕が家具や日常の衣服と共生しているようなもので、大体、僕の眼鏡、ライター、煙草と同じ扱いなんです。

僕には、自己の全生活を規定するには出来るだけ多くのものを自己が持っていたい、ある時点で僕の日常生活を表象する全部を身につけていたいという思想があります。この思想は、それ故、現在における僕の全存在であって、他の何人にも依存しない、または誰にも何も頼ま

ない、僕の所有のすべては僕の直接な処理に委せられているということなのです。もしこれが人に対する一種の優越感だとすれば、それは全く間違いだと自覚しています。

M　それにしても貴方はチップのやり過ぎですよ。

S　いつもそうなんだ。

M　とすれば貰った人にとっては迷惑じゃないですか。

S　言い過ぎだね。

M　貴方からは屈辱にならないで可能な相互性が学べないようですね。

S　相互性はないかも知れないけど、親切はあるよ。キャフェの給仕は僕が多いチップをあげる事実を認めるしそれで親切を返して呉れる。僕の考えでは、人がチップで生活するのなら、できるだけ多くあげよう。というのは、僕がある人の生活資に役立つことで、その人はいい生活ができると思うからです。

M　貴方にとって興味が未だにあるのは何でしょうか。

S　申しあげた通り、音楽。それに哲学と政治です。

M　それが興奮を呼ぶのですか。

S　いや、僕を興奮させるものはないね。僕は少し上に立っている……

M　何か言い足すことはありませんか。

S　ある意味ではみんな言い足したいけど、別の意味では何もないよ。みんなというのは僕達がここで作りあげた関係性においてであって、他にも色々なことが注意深く探究されるべきなんだ。しかしそれはインタビューじゃ出来ない。インタビューの度にそう思う。インタビューはある意味で挫折することなんだ。人は多くの事を言おうとして挫折する。

インタビューは当事者達を人生に持込もうとして、一人が答えると正にその時、反対のものになってしまう。でもこれを語った僕は、七〇才の僕であって、それが必要だった。

M　貴方はシモーヌ・ド・ボーヴァルのようにすでに「…であった」と総括しないんでしょうね。

S　やらないね。そうは言わない。それに彼女だって、人生が…であったとは言っていないんだ、自分の書いた本（〝条件の力〟）では条件の中で軽くみられたと感じている訳だしね、それはアルジェリア戦争後のことだし。僕は言わないよ。何ものかによって、僕は既にあったのではない。何ものにも僕は失望していない。多くの良い人、悪い人を見てきたが、悪い人もある目的との関係性においてしか悪くなかったー僕は書いた、生きた、だから悔む事はない。

M　要するに貴方にとっての人生は良かったのですね？

S　全体としては、そうです。非難できない訳じゃない。僕の希望は叶えて呉れたが、それと同時に、それが必ずしも多くはなかったのも思い知らせて呉れた。だからってどう出来るんだろう？（インタビューはこの最後の一句の気落ちした調子に笑いを伴って終った）

この笑いは記録して置いて下さい。つまり〈笑いを伴った…〉とね。

以　上

（ノート）この記事は「ニューヨーク・リビューオブブック」のポール・オースターとリダー・デビスの署名英訳文に拠った。私がサルトルのアナーキスト宣言ーまあそれ程大それたものではないにしろーを知ったのは八月十六日付のフリーダム紙でN・Wの署名のコラムだった。早速文芸批評をやるアーサー・モイゼに連絡してニコラス・ウォーターのものと思われる記事の原文を入手したいと申し出ると航空便で寄せて呉れたのだ。同じ頃「朝日ジャーナル」で連載したそうだが、そちらは見ていない。

サルトルは息の長い実存主義の思想家である。彼の名はわが国では三木清の著作や西田幾太郎の著作にも見えるが、当時は大体彼の想像力に関して取上げられていたようだ。小説では織田作之助が「可能性の文学」の中でサルトルの「水いらず」を揚げていたと思う。だがわが知的高踏派ないし教養派を狂喜させたのは50年代のカミュ・サルトル論争であり、彼の殆んどの著作が翻訳され哲学書はその難解さの故に若い頭脳を相当痛めつけたろうと拝察する。

私の理解ではサルトルの決定的な思想の柱は、アプリオリ（先験性）の否定で、ハイデッカーと違う彼の実存は、メタフジカーに背を向けて、現実世界を取り入れた点にあると思う。〈もし私が在るならば、存在はなく、私が在らざれば、存在がある〉なんて、響きのいい原文を口誦していると、何んのことはないその裏面を通底しているのが〈無〉だったとは！　しかもその無とはリンゴの芯が腐ったものにたとえられているなんて！　彼はまた現実認識をスキーにたとえている。スキーは滑るものであって、その深層を被いたスキーで感知するのだ。その軽ろやかさの故に、私にはなじめなかったが、フランスの天才ではプロディガルーその意味は厖大な著作とそれを可能にする能力ーが一つの目安になるのだからまずよくやったと考えなければなるまい。彼の〈弁証理性批判〉は題からしてカントの作品を想起させるが、この

インタビューで明らかにした成立事情を考慮して読みなおしてみよう。

私達としては彼のアナーキスト宣言をどう理解すればよいだろうか、先のN・W氏は＜死の床での回心であって、それはそれだけとして記録に価する＞と述べ同年配のアーサーは俺なんか朝六時半から働いていると言ってきた。人それぞれに生の条件があって、サルトルの金銭観はフランスの社会で通用するものなのだろう。私としては少くともサルトルが70才の告解において、自己の個人主義をカソリックやプロテスタントに連絡せず、自由人（リベルテール）のまゝありたいと述べたのは、フランスの知性として、その伝統の一脈に身を置き、実にストイック志ゴール人として生を完うするものだと評価しよう。そしてここにアナーキズムの思索練磨にあてて、彼の＜存在と無＞＜弁証理性批判＞が役立ち、現実解明の手がかりになれば、それは等しく私達の思想と行動を豊富にするだろう。「異議申し立て」の語だって、一九六八年のパリで彼が現実の中から概念づけたのである。また実存主義の政治思想としての帰結が、カソリックへ向ったムーニエのペルソナリスム（人格主義）と違ってアナーキズムに向うこともここで十分納得がいった。

（文責・はしもと）

編集後記

▲最近、学生街をよく歩く。どの大学も鉄柵にグルリと囲まれている。内側で大学解放を叫んでいてもあの高い壁のある限り虚しい感じを与える。まずヤスリであの柵を倒す作業にとりかかるのがよさそうだ。（H大学生の友へ）

（K）

▲自分で他人の熱情が感得できなくなったな、と思う。年だ。この年だという思いがたえず駆ける。又一日が過ぎる。過ぎていったことにすら感興が涌かない。でもいいのだ。こういう不感性、この不感性が僕にはとてもなつかしい。孤独の味というのはこんなものだった。僕はそう思う。

（山本）

▲今のところ月二回の編集会議に参加し、この「後記」を書くことしかできないようです。もっぱら、アナキズムの思想を研究し、その運動を展開しようとしているなら別ですが、僕にとって月一回の発行はちょっと負担です。実際は、編集の仕事は他の人にまかせてしまっているのですが……

個人をとりまいている諸問題をひとつの思想に集約して考えるか、あるいは、それぞれの問題を具体的に取り上げようとするかは、人によって違うでしょう。僕としては、社会・文化状況の具体的な問題に興味があり、アナキズムの思想・運動は、もっとのんびりと、長期的に考えていきたいのです。

（江藤敏和）

▲お蔭様で「アナルコ・フェミニズム」特集についてはお叱りもなく、読者に受入れられたことと思います。ただ寄稿して下さった人達には、十分にご意向を誌面に反映したかどうかでちょっと心配です。米国フレデリカ嬢はレイアウトがよいとほめて呉れたが一人に言わせると日本語が読めないんだからそれぐらいしか出来ないでしょうと言う。もっともベニー君が要約をしている筈なんだけどーそして当人は日本の女性の発言が少ないのは淋しい。アナルコフェミニズムをどう考えているんだろうか？　と案じています。意見のある人は寄せて下されば伝達するし、ベニー君は平安朝以降の日本文が読めます。

▲連帯会議に出席しました。人は変れど思想は変らずー多くの事が話され、討論されました。表われた主題は各人のやり方で行くのか、それを突破して思想で制御するのか：が論点でしょう。要約すると自然発生の自発性だけでいいのか、それだけでは不十分で意識性を重視するというあの＜何をすべきか？＞に至っているのでしょう。

（莫空人）

誇大広告（9／12朝日新聞朝刊より）

ライシャワー教授の論文は、「歴代の天皇で初めてのご訪米は日米関係にとって意義が深く、日米が新しい、一層幸多い時代に入ったことの象徴である」としている。

皇室の長い伝統は「君臨すれど統治せず」であり、「二貫して象徴的役割を果たしていられる」と紹介し、「天皇がお下しになった唯一の政治的決断として知られているのは、第二次大戦末期に降伏を決定したことだ。最高司令部が天皇に仰いだ降伏についての決裁に関し、天皇はたちどころに降伏を支持され、自ら玉音放送によって全国民に降伏を発表された」と述べている。

また、両陛下の横顔については、「天皇陛下は静かな学究はだのお方であるが、人間的な温かみと広範な知識をお持ちで、駐日大使として務めた期間も、陛下の親しさ、誠実さ、率直さには深い感銘を受けた」と記し、皇后陛下については「これほど本当に温かく、親しみがあり、優雅なお人柄をほかに知らない」と書いている。

（大使時代に受けた右翼少年による刺傷以来、日本の皇室史観を受入れました）

—エドウイン・ライシャワー—